

探訪 北の風景 65

白滝ジオパーク オホーツク管内遠軽町

青木和弘

北海道の屋根、大雪山系の北東山麓にある遠軽町白滝に、無尽蔵の黒曜石（こくようせき）がある。埋蔵量は数十億トンといわれ日本一である。白滝の黒曜石は220万年前に噴火した溶岩が急速に冷えたもので、そのメカニズムは「白滝ジオパーク交流センター」で詳しく学ぶことができる。

黒曜石は十勝石とも呼ばれ、薄くはがれるように割れて鋭利な刃物になるので、槍（やり）先や鎌（やじり）、ナイフなどの石器に加工された。北海道では擦文時代の12世紀ごろから鉄が使われるが、石器は材料が手に入りやすいので、それ以降も長く使わ

れた。特に皮のなめしには黒曜石が鉄より優れているとされる。赤石山の南側を東西に流れてオホーツク海に注ぐ湧別川の河岸段丘などに、100カ所ほどの後期旧石器時代の遺跡が分布している。3万年前〜1万2千年前、ここは石器原材料の大産出地で、石器製作の一大拠点だったのだ。

白滝の遺跡群は1950年代から注目されてきたが、1995年〜2008年に旭川・紋別自動車道の建設事に伴う大規模な調査が実施され、20遺跡、約14万平方メートルから767万点、13トンもの石器が出土した。ほとんどが旧石器時代に属し、99%以上が黒曜石製だった。これらは現在、遠軽埋蔵文化財センターで見学できるが、このときの調査では当時の人々の住居跡など生活の痕跡は見つからなかった。だから定住することなく獲物を追って移動する遊動生活を送っていたのではないかと考えられている。

気候が温暖になり定住生活が始まるのは1万5千年ほど前からの縄文時代とされるが、大阪や神奈川では、2万年前の竪穴式住居跡が発掘されているから5千年も早いところがあったようだ。よほど気候や食料に恵まれたのだろう。旧石器時代の人骨が少ないのは、日本は火山灰による酸性土壌が多く、分解されてしまうためと思われる。

話を石器に戻すが、膨大な石器の破片を接合して復元すると石器の製作方法が分かる。白滝遺跡



遠軽町埋蔵文化財センターの展示室には重要文化財である「北海道白滝遺跡群出土品」が展示されている。石器1423点、接合資料435組、合計1858点で、旧石器時代のものだ。膨大な量の石器の破片を組み合わせて復元する接合資料作りは気が遠くなるほど根気のいる仕事だ

群では、北海道内のほぼすべての石器群が出土するので、いろいろな地域から石器製作者が頻繁に訪れていたことが分かる。白滝の黒曜石を使った石器は、道内はもちろん青森の縄文遺跡・三内丸山遺跡やサハリンなどでも使われている。さらにはるかシベリアやアラスカにも共通する製造法が見られ、白滝の黒曜石ネットワークは非常に広範囲におよぶ。

当時の人々は、いつどこから来て、どんな暮らしをしていたのだろう。人類が東アジアから3つのルートで日本にやってきたのは3万8千年前以降とされる。白滝で石器作りが始まる3万年前は氷河期で海水面が低く、北海道とサハリン、ユーラシア大陸は陸続きだった。北海道はいまより





遠足で赤石山の黒曜石八号沢溶岩露頭の見学に訪れた白滝小学校の5、6年生。背後が溶岩露頭。国有林内なので許可を得なければ行けない。白滝ジオパークの「ジオツアー」に参加するといひ=白滝ジオパーク推進協議会提供



白滝ジオパーク交流センターや遠軽町埋蔵文化財センターは、遠軽町白滝支所などがある庁舎にある。
紋別郡遠軽町白滝138の1。
電話0158・48・2213（ジオパーク推進課）

ずっと寒冷で乾燥し、草原が広がっていた。マンモスやナウマンゾウ、ヘラジカ、バイソンなどの大型獣を追って、人々は大陸から北海道にやって来たと考えられている。

2万年前から地球はだんだん温暖になり海面は上昇。森林が発達し、海では採集しやすい貝などが繁殖する。大型獣は絶滅するが、狩猟・採集・漁労などを組み合わせた定住型の生活になり竪穴式住居が増えた。そこに土器が作られ、煮炊きや種子の貯蔵が飛躍的に発達する。縄文時代（新石器時代）の到来だ。素早い動きの小動物を射る弓に使う黒曜石の鏃が作られる。村が形成され、日本列島の旧石器人は、長い年月をかけて適応し、縄文人になっていったようだ。